

## 俱舍論 (I.10d-11) に対する 未知の註釈書断簡備忘

松 田 和 信

### 1 ベンドール写本と仏教論書断簡

前世紀末、1898年から1899年にかけて英国ケンブリッジ大学の梵語学者セシル・ベンドール (Cecil Bendall, 1856-1907) は、カトマンドゥのネパール王室礼拝堂内のドゥルバル・ライブラリー (Durbar Library) に保存されていた膨大な梵文写本を調査し、その中に10世紀前に遡る古書体で書写された種々の貝葉写本断簡類を発見する<sup>1)</sup>。それら一連の古写本は、すべて断簡にすぎないとはいえ、ネパール地域に伝えられた最古層の写本を含み、その中には貴重な仏教文献の断簡も数多く認められた。その後、ドゥルバル・ライブラリーでは、発見者であるベンドールの名を取って 'Bendall's Puka' なる名称でそれらがまとめて保存されていたが、やがて1世紀という時間の中でそれらがベンドールによって発見された重要文献であることも忘れ去られ、注目する研究者もいなくなってしまう。10年前より筆者は、ドゥルバル・ライブラリー所蔵文献を引き継いだ現在のネパール国立公文書館 (National Archives) が保存する写本類の中からベンドール調査写本を拾い出し、それらをマイクロフィルムで取り寄せて解読する作業を行ってきた。

さて筆者は、ベンドール調査写本の中から、筆者によって新たに同定された『瑜伽師地論』の「摂決択分」および同じ『瑜伽師地論』の「摂異門分」の断片各1葉を発

---

1) ベンドールの写本調査とその成果については拙稿「セシル・ベンドールのネパール写本探査行 (1898-99)」『佛教大学総合研究所報』第11号 (1996年11月) 18-22頁参照。

表しているが<sup>2)</sup>、それらはいずれも国立公文書館において「仏教論書に属する諸貝葉 (Bauddhasāstriyapattraṇi)」というタイトルでまとめられた、8葉よりなる断簡類の中に見い出されたものであった<sup>3)</sup>。それら8葉は、それぞれサイズ、書体、筆跡が異なり、外形からも同一写本に由来するものではないことが分かる<sup>4)</sup>。恐らく何らかの事情で、8種類の異なる文献からこぼれ落ちた古写本の断片各1葉を便宜的にひとまとめにしたものと思われるが、国立公文書館においてネパール・ドイツ写本保存プロジェクト (Nepal/German Manuscript Preservation Project) の作成したマイクロフィルム<sup>5)</sup>に収められている順序に従ってその内容を示せば以下の通りである。

- 1 瑜伽師地論 (*Yogācārabhūmi*) の撰決択分 (*Viniścayasamgrahaṇi*)
- 2 法華経 (*Saddharmapuṇḍarikasūtra*) 第1章
- 3 ダルマキールティの知識論決択 (*Pramāṇaviniścaya*) 第3章
- 4 未知の俱舍論注釈書
- 5 シャンカラのガウダパーダ頌釈 (*Gauḍapāḍīya-kārikā-bhāṣya*)
- 6 比丘尼羯磨作法 (*Bhikṣuṇī-karmavācanā*)
- 7 十万頌般若経 (*Śatasāhasrikā Prajñāpāramitā*)
- 8 瑜伽師地論の撰異門分 (*Paryāyasamgrahaṇi*)

これら8葉のうち、以前より学界に知られていたのは、ベンドール自身によって同定され出版された第6の『比丘尼羯磨作法』1葉のみであった<sup>6)</sup>。残りの7葉は筆者によって初めて同定されたものである。筆者は上述の『瑜伽論』『撰決択分』および『撰異門分』の他、『知識論決択』1葉をウィーン大学のシュタインケルナー教授と共に

2) 「撰決択分」の断簡については、「『解深密経』における菩薩十地の梵文資料—『瑜伽論』『撰決択分』のカトマンドゥ断片より—」『佛教大学総合研究所紀要』第2号(1995) 59-77頁。「撰異門分」の断簡については、「『瑜伽論』『撰異門分』の梵文断簡」『印度哲学仏教学』第9号(1994) 90-108頁。前者は撰決択分において『解深密経』が全文引用される箇所に対応する。断簡がカバーするのは同経の「分別瑜伽品」の末尾から「地波羅蜜品」の冒頭部にかけての範囲である。拙稿はそのうち「地波羅蜜品」の部分を出版したもので、「分別瑜伽品」の末尾部分は未出版のまま残されている。

3) 国立公文書館ではMS. No. I-1697 Vi Bauddhadarśana 64 Ka'の登録番号で保存されている。

4) 国立公文書館のカタログ *Bṛhatsūcīpattraṃ — Bauddhaviśayaḥ —* (Kathmandu, 1964-1966) Vol. VII, Part 2 (77頁) では、書体は Licchavilipi (リッチャヴィー文字=グプタ文字のこと) および Pracina Nevārilipi (初期ネパール文字)、サイズ20×2インチ等の情報が掲載されているが、サイズが8葉の中のいずれを指すのか不明。

5) Reel No. A39/3, 1970年3月に撮影されたもの。

6) C. Bendall, "Fragment of a Buddhist Ordination-Ritual in Sanskrit", *Album-Kem* (Leiden, 1903) pp. 373-376.

同で<sup>7)</sup>、さらに『法華經』1葉をベンドール写本に含まれる他の断簡とまとめて徳島大学の戸田宏文教授と共同で出版している<sup>8)</sup>。

従って、8葉のうち5葉はすでに公表されているので、残りは3葉である。この中、非仏教文献である第5の1葉も、シャンカラ研究者にとっては重要文献かもしれないが<sup>9)</sup>、筆者にとって最も注目すべきは第4の『俱舎論』註釈書の断簡1葉である。しかし、この1葉が何らかの俱舎論註釈書の断片であることは間違いないが、残念ながら、誰によって著された、如何なる表題を持つ註釈書であるかは今なお不明のままである。筆者にとって、これが俱舎論註釈書断簡であることが判明して随分時間が経つが<sup>10)</sup>、このまま筆者の許に秘蔵し続けても、近い将来その正確な正体が筆者によって明らかにされる可能性は低いであろう。従って、はなはだ不完全ではあるが、現時点での筆者のローマ字転写をそのまま公表して、俱舎論研究の専門家の方々に判断を仰ぐことにしたい。将来の同定に向けての基本資料になればと願う次第である。

## 2 断簡の外形と注釈される俱舎論の範囲

筆者はマイクロフィルムを通して断簡を解読しているのみで、現地に赴いて現物を実見したわけではない。第4の1葉は、そのサイズは不明であるが、両面に9行ずつ書かれ、貝葉としては大型であろうと思われる。本稿に附した写真を参照していただきたいが<sup>11)</sup>、用いられた書体はネパール系写本に現れる文字の中でも最古層に属するものの1種と見なされるもので、ギルギット写本に現れる第2型文字（ギルギット・バーミヤン第2型書体）と同一書体と判断しても差し支えない。我が国に伝えられた悉曇文字とも共通する書体である。なお貝葉の左端約8分の1が破損により失わ

7) “The Sanskrit Manuscript of Dharmakīrti’s *Pramāṇaviniścaya*, Report on a Single Folio Fragment from the National Archives Collection, Kathmandu”, *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens*, Band 35 (1991), pp. 139-149.

8) “Three Sanskrit Fragments of the *Saddharmapuṇḍarikasūtra* from the Cecil Bendall Manuscript Collection in the National Archives, Kathmandu”, 『徳島大学教養部倫理学科紀要』No. 20, 1991, pp. 21-35.

9) 第2章第7頌から13頌までに対応する。他の断簡が古い書体で写されているのに対し、この1葉のみ標準的なネパール文字が用いられている。非仏教文献がなぜ紛れ込んでいるのか不明。なお第7の『十万頌般若』の断簡については未だ詳細に確認できていないが、玄奘訳では「大正蔵經」第5巻、516-517頁付近に対応するようである。

10) 本稿で取り上げる断簡に筆者が最初に言及したのは今から9年前、東北大学における日本印度学仏教学会に於いてであった。拙稿「ネパール系古層写本の新比定」（『印度学仏教学研究』第39巻1号、1990）386-389頁参照。

11) 本稿に使用した写真は、1989年、当時の国立公文書館教授 B. D. ダンゴル (Dangol) 氏の助力を得て入手し、教授より研究と掲載の許可をいただいたマイクロフィルム（註5参照）より焼き付けたものである。

れている。それによって各行約10音節程度が失われているものと思われる。左端に書かれていたはずの頁番号も欠落している。

さて本断簡によって注釈される『俱舍論』の該当箇所は第1章「界品」の第10偈のd句より第11偈の範囲である。第10偈のd句は「11種の接触（触 *spraṣṭavya*）」について、つづく第11偈は無表についての定義を与える。ただし第11偈の注釈文は本断簡の裏5行目から始まり、裏面の末尾までではその冒頭部分のみをカバーするにすぎない。ローマ字転写に先だって、まず『俱舍論』の該当部分の原文と和訳を示しておくことにしたい<sup>12)</sup>。

*spṛśyam ekādaśātmakam //10d//*

*spraṣṭavyam ekādaśadravyasvabhāvam / catvāri mahābhūtāni ślakṣṇatvaṃ  
karkaṣatvaṃ gurutvaṃ laghutvaṃ śītaṃ jighatsā pipāsā ceti / tatra bhūtāni  
paścād vakṣyāmaḥ / ślakṣṇatvaṃ mṛduta / karkaṣatvaṃ paruṣatā / gurutvaṃ  
yena bhāvās tulyante / laghutvaṃ viparyayāt / śītam uṣṇābhilāṣakṛt / jighatsā  
bhojanābhilāṣakṛt / pipāsā pānābhilāṣakṛt / kāraṇe kāryopacārāt / yathā*

*buddhānām sukha utpādaḥ sukhā dharmasya deśanā /*

*sukhā saṃghasya sāmagrī samagrāṇām tapaḥ sukham //*

*tatra rūpadhātau jighatsāpipāse na staḥ / śeṣam asti / yady api tatra vastrāṇy  
ekaśo na tulyante saṃcitāni punas tulyante / śītam upaghātakam nāsti / anugrā-  
hakam kilāsti /*

*yad etad bahuvīdham rūpam uktaṃ tatra kadācid ekena dravyeṇa cakṣurvi-  
jñānam utpadyate yadā tatprakāravayavacchedo bhavati / kadācid bahubhir yadā  
na vyavacchedaḥ / tad yathā senāvyūham anekavarṇasaṃsthānam maṇisamūham  
ca dūrāt paśyataḥ / evaṃ śrotrādivijñānam veditavyam / kāyavijñānam tu param  
pañcabhiḥ spraṣṭavyair utpadyata ity eke / caturbhir mahābhūtair ekena ca śla-  
kṣṇatvādinā / sarvair ekādaśabhir ity apare / nanu caivaṃ samastāmbanatvāt  
sāmānyaviśayāḥ pañca vijñānakāyāḥ prāpnuvanti na svalakṣaṇaviśayāḥ /  
āyatanasvalakṣaṇam praty ete svalakṣaṇaviśayā iṣyante na dravyasvalakṣaṇam  
ity adoṣaḥ /*

12) Pradhan 1st ed., p. 7, l. 7-p. 8, l. 9. Ejima ed., p. 10, l. 2-6. 12, l. 3. 桜部建『俱舍論の研究（界・根品）』（法蔵館，昭和44年）153-155頁参照。桜部博士の明確な和訳がすでに存するので筆者による和訳は蛇足の感があるが、本稿における注釈書断簡ローマ字転写の理解に資するため煩を恐れず、あえて付け加えておく。

idaṃ vicāryate / kāyajihvendriyayor yugapad viṣayaprāptau satyāṃ katarad  
vijñānaṃ pūrvam utpadyate / yasya viṣayaḥ paṭiyān / samaprāpte tu viṣaye ji-  
hvāvijñānaṃ pūrvam utpadyate / bhoktukāmatāvarjitatvāt santateḥ / uktāḥ pañ-  
cendriyārthāḥ yathā ca teṣāṃ grahaṇam /

感触（触）は11種よりなる。(10d)

感触は11種のもの (dravya) よりなる。(1-4) 四大種と、(5) なめらかさと、(6) 粗さと、(7) 重さと、(8) 軽さと、(9) 冷たさと、(10) 飢えと、(11) 渴きとである。この中、〔四大〕種については後で説く。なめらかさ (ślakṣṇatva) とはやわらかさ (mr̥dutā) である。粗さ (karkaṣatva) とは荒さ (paraṣatā) である。重さ (gurutva) とは、それによってものが計量されるところのものである。その逆が軽さ (laghutva) である。冷たさ (śīta) とは暖かさに対する欲求を作すこと (uṣṇābhilāṣakṛt) である。飢え (jighatsā) とは食物に対する欲求を作すこと (bhojanābhilāṣakṛt) である。渴き (pipāsā) とは飲み物に対する欲求を作すこと (pānābhilāṣakṛt) である。原因を意味して結果を言い表わしているからである。例えば、

諸仏の出現は楽であり、法を説くことは楽であり、僧伽の和合は楽であり、和合した者たちの修行は楽である<sup>13)</sup>、と言う如し。

この場合、色界においては飢えと渴きは存在しないが、残りのものはある。たとえそこ (色界) では一着一着の衣服は計量できなくても、集めたものは計量されるのである。「〔色界では〕有害なる冷たさはないが、有益なる〔冷たさ〕はある」と伝承する (kila)。

多種の色が説かれたが、その場合、ある時には、一つのものに依じて眼識が生じる。その時、その〔ものの〕種類が判別できる。ある時には多くの〔ものに〕依じて〔眼識が生じる。〕その場合には〔個々のものの種類の〕判別はできない。例えば、多様な色と形をした軍の隊列や宝石の集まりを遠くから見ると人の場合の如くである。耳等の識についても同様に理解すべきである。「ただし身識は、単に5種の感触、即ち、四大種と、なめらかさ等のひとつに依じて生じる」とある人々は言う。「11種すべてに依じて〔身識は生じる〕」と別の人々は言う。もしそのようであるなら、五識身は〔多くの対象を〕合わせたものを対象とするので、共相を対象とするものとなり、自相を対象としないことになるのではないか。処の自相に対して、それら〔五識身〕は自相を対象とすると認められ、〔個々の〕ものの自相に〔対してでは〕ないから、過失ではない。

次のことが分析される。身根と舌根が同時に対象に向かう時、どちらの識が先に生じる

13) *Udānavarga*, xxx-22, *Dhammapada*, 194.

のか。より強い対象に対する〔識が先に生じる。〕〔強さの〕等しい対象に向かう時には、舌識が先に生じる。〔心〕相続は食欲に向けられるものだからである。五根の対象と、どのようにそれらの〔対象を〕認識するかについて説き終わった。

avijñaptir idāṇiṃ vaktavyā / seyaṃ ucyate

vikṣiptācittakasyāpi yo 'nubandhaḥ śubhāśubhaḥ /

mahābhūtāny upādāya sa hy avijñaptir ucyate // 11 //

vikṣiptacittakasyeti tadanyacittasyāpi / acittakasyāpīty asaṃjñinirodha-samāpattisamāpannasyāpi / apiśabdenāvikṣiptasacittasyāpīti vijñāyate / yo 'nubandha iti yaḥ pravāhaḥ / śubhāśubha iti kuśalākuśalaḥ / kuśalākuśale prāpti-pravāho 'py astidṛṣa iti tadviśeṣaṇārtham ucyate mahābhūtāny upādāyati / hetvartha upādāyārtha iti Vaibhāṣikāḥ / jananādihetubhāvāt / sa hy avijñaptir iti hiśabdas tannāmakaraṇavijñāpanārthaḥ / rūpakriyāsvabhāvāpi satī vijñaptivat paraṃ na vijñāpayatīty avijñaptiḥ / ucyata iti ācāryavacanāṃ darśayati / samāsatas tu vijñaptisamādhisambhūtaṃ kuśalākuśalarūpam avijñaptiḥ /

今や無表が説かれねばならぬ。それが説かれる。

乱れた〔心の人〕にも、無心の人にも連続し、浄・不浄なる、大種に基づいてあるもの、それがすなわち無表と言われる。(11)

「乱れた心の人にも」とはそれ以外の心の人にも、である。「無心の人にも」とは、無想定と滅尽定に入った人にも、である。「も (api)」の語は、乱れていない、あるいは有心の人にとっても、と知られる。「連続し」とは相続する、である。「浄・不浄なる」とは善・不善なる、である。善・不善という点では、得 (prāpti) の相続も同様にあるから、それと区別するために「大種に基づいてある」と言われる。「基づいて」の意味は、因の意味であると毘婆沙師たちは言う。生〔因〕等の〔五つの〕因となるからである。「それがすなわち無表」という中の「すなわち (hi)」の語は、その命名を知らしめるためである。色と作用を本質として存在する点では識と同様ではあるが、他に知らしめないから無表である。「言われる」とは師〔であるわたくし世親〕の言葉であることを明示したのである。要するに、表〔業〕と三昧とによって生じた善・不善なる色が無表である。

### 3 俱舍論注釈書断簡のローマ字転写<sup>14)</sup>

recto

1 /// -yajas tulāyā mukhāvanatir bhavati (/) śītam uṣṇābhilāṣakṛd iti katham grīṣme śītam uṣṇābhilāṣakṛc charadī vā śītam uṣṇābhilāṣakṛd iti (/) krāmo tu



sarvathā{n} uṣṇatayasyānyasyāpi tad eva lakṣaṇa(m) tad api hi kālapatitam  
uṣṇābhilāṣaṃ kuryād iti...te tad iti śītaṃ (/) anugrāhakopaghātaṃ ...yāśur  
gamyā-

2 /// (*jighatsā bhojanābhi*) *lāṣakṛd* iti jighatsā hetur jighatsā annaḥ sparśaviśeṣaḥ  
(/) *kāraṇe kāryopacārād* iti attumicchā jighatsā caitasiko dharmmaḥ tatkāraṇa-  
... [ji]ghatso 'yaṃ kṛt cedam uktaṃ (/) *jighatsā bhojanābhilāṣakṛd* iti  
itarathā hi jighatsā bhojanābhilāṣe ity evācakṣyat\* / evaṃ pātuṃ icchā pipāsā  
tatkāra-

3 /// ... upacaryate / ata evāha *pipāsā pānābhilāṣakṛd* iti (/) *yathā buddhānām*  
ityādi na hi buddhānām utpāda eva sukhaṃ kāraṇaṃ tu sukhasyeti kāryopacā-  
ra(m) labhate *buddhānām sukha{m}* *utpāda* iti / *sukhā dharmasya deśanetyādi* /  
dharmadeśanādīnāṃ sukhakāraṇaṃ ca sukhopacāraḥ gāthāt tūdhāraṇamāttraṃ  
vivakṣitam arthaṃ

4 /// *tatra rūpadhātau jighatsāpipāse na sta* iti avyāvādhātmabhāvatvād itarathā hi  
tatrāpi kṣut pipāsā duḥkhaḥprasaṃjyena prabhāvadac chandād rūpadhātau kathaṃ  
gurutvam astity ata āha *yady api tatra vastrāṇy ekaśo na tulyamte saṃcitāni punas*  
*tulyanta* iti nanu caikaśo tulyaṃ prabhādiṇītam apy atulyaṃ drṣṭim iti drṣṭaṃ  
ta-

5 /// .. sti tad ekaśo tulyaṃ saṃcitam tulyam iti brāmaḥ āguryatvāc ca āguryaṃ  
khalv api rūpāvacaram rūpaṃ vimānaprādurbhāvāt\* / pātītānāṃ vādhāraprayo-  
janam asti nānyeṣāṃ ādhārādheyabhāvāc ca na tu laghvanekaprabhāsayā te 'py  
ādhārādheyabhāvo 'sti (/) *śītam upaghātakaṃ nāstīti* avyāvādhātmabhāvatvāt\* /  
*anugrāhakaṃ kilāsti*

6 /// vaibhāṣikābhiprāyaparidipakārthaḥ (/) *na hi tatra samādhivyaḥ*iriko 'nugra-  
(ha)hetur *astīti* samādhigrahaṇena tatsahetutām api grahaṇaṃ veditavyaṃ (/)  
*yad etad bahuvidhaṃ rūpaṃ uktaṃ iti āyatana rūpaṃ dvividhā vimśatidheti*  
(I-10a) *yadā tatprakāravavyavacchedo bhavatīti* / nīlādivarṇṇaprakāraprthagbhāvaḥ

14) 以下のローマ字転写における『俱舍論』本文の引用(斜体で示した)の解説については比較資料もあり、確信を持ってここに読みを提示できるが、注釈部分については、その正体の判明していない現時点では、多くの誤読が忍び込んでいるに相違ないことを白状しておきたい。注釈部分のローマ字転写については、この断簡が俱舍論注釈書の断片に相違ないことを提示した程度に理解していただきたい。将来正体が判明した時に、改めてより正確なローマ字転写と、それに基づくテキスト及び和訳の発表を約束しておきたい。



*evam śrotrādivijñānam veditavyam i-*

7 /// .. ḥ uktaḥ śabdas tu aṣṭavidha (I-10b) iti tatra kadācid ekena dravyeṇa śrotravijñānam utpadyate *yadā tatprakāravayavacchedo bhavati kadācid bahubhir yadā na vyavacchedaḥ (/)* tad yathānekaśabdasaṃmūhaṃ kalakalāśabdam dūrāc chruṇvānaḥ evaṃ ghrāṇajihvāvijñāne api yathāsaṃbhavaṃ yojyaṃ (/) *kāyavijñānam tu paraṃ paṃcabhir* iti / kathaṃ kadācid eke-

8 /// (ta) tprakāravayavacchedo bhavati kadācid dvābhyāṃ yāvat paṃcabhir yadā na vyavacchedaḥ (/) katamaiḥ paṃcabhir ity ata āha / *caturbhir mmahābhūtair ekena ca ślakṣṇatvādinā* kiṃ kāraṇaṃ karkkaśatvādinām anyabhūtacatu-  
škāśritatvāt *sarvair* apy *ekādaśabhir ity āpara* iti yadā prakāravayavacchedo na bhavatīti (/) *prakṛtaṃ nanu caivam* iti vistaraḥ

9 yad hi cakṣurvijñānasya nilākārasyalambanaṃ nilaṃ rūpaṃ tad evaṃ samastālambanasyāpi cakṣurvijñānasya paricchinākārasyalambanaḥ (!) tathā śrotraghrāṇajihvākāyavijñānānām paricchinākārāṇaṃ yadālambanaṃ śabdādi tad evānyeṣāṃ a. i. ātrādi. i ..

verso

1 /// .. s. ti *sāmānyaviśayā (ḥ) pañca vijñānakāyāḥ prāpnuvanti* abhedasāmānyaṃ sāmānyena viśaya eṣāṃ iti sāmānyaviśayāḥ abhedaviśayā iti yo 'rthaḥ evaṃ ca kṛtvā parihāraṃ vakṣyati / *bhoktukāmatāvarjjitatvāt saṃtater* ato 'ktukāmasya tu samaprāpte viśaye yad vāśrayaṃ yat tad utpa. . . . .

2 /// *āyatanasvalakṣaṇaṃ* ity evamādi svalakṣaṇaṃ lakṣaṇaṃ āyatanasya svalakṣaṇaṃ āyatanasvalakṣaṇaṃ tad yathā rūpāyatanasya cakṣurvijñānavijñeyatā yāvat spraṣṭavyāyatanasya kāyavijñānavijñeyatā tad ālambanasvalakṣaṇaṃ *praty ete* paṃcavijñānakāyāḥ *svalakṣaṇaviśayā iṣyamte na dravyasvalakṣaṇam* i(ti).. kaṃ praty ete svala-

3 /// .yasya svalakṣaṇaṃ dravyasvalakṣaṇaṃ katamasya dravyasya nilādikasya tat punar nilādikatvaṃ nilādyākāre cakṣurvijñānādivijñeyatvaṃ yadi punar dravyasvalakṣaṇaviśayā i .ye..tkā dā . . . . . samastālambanaṃ cakṣurādivijñānaṃ notpadyata iti uktaṃ syāt tac cotpadyata iti kāyajihvendriyayor iti vistaraḥ tayor hi prāptaviśaya-

4 /// .. yopanipātakramakṛto vijñānotpādakramaḥ syāt sa ca na saṃbhavati

spars̄arasayor avinibhāgavarttitvād ata āha / *yasya viṣaya(h) paṭiyān* iti yasyen-  
driyasya *bhoktukāmatāvarjitatvāt saṃtater* iti cchando hi bhoktukāmatā s. ca  
manaskārasaṃprayukta iti manaskāravaśā(c) cālabhanāntareṣu cittasantatiḥ  
prava(r)ttata iti

5 /// .. vati / na ca bhoktukāmatā / varjitā saṃtater bhavati / ..... dva ...  
vāśrayaṃ tatpūrvam utpadyate *uktāḥ pañcendriyā* iti pañcānām indriyānām  
arthāḥ pañcendriyārthāḥ *yathā ca teṣāṃ grahaṇam* iti teṣāṃ arthānām kathaṃ  
grahaṇam uktaṃ tatra kadācid ekena dravyena cakṣurvijñānam utpadyata iti  
vistaraḥ (/) *vikṣiptācittakasyāpīti* vistaraḥ/

6 (*vikṣiptācittakasyāpīti*) vacanād vāgvijñaptirūpaṃ viśeṣitaṃ bhavati (/) na hi  
tadanyacittakasyācittakasya vānuvarttate uccheditvāt\* / *yo 'nubandha* iti  
vacanāt {} kāyavijñaptir viśeṣitā (/) nanu ca vijñapter apy anubandho 'sti  
prakarṣṣo 'tra vijñāpyate yaḥ sutarām anubandha iti (/) avijñapteś ca sutarām  
anubandho bhavati vijñapter vyāvṛttāv api tadavyāvṛtteḥ

7 /// kāyāḥ so(!sā) tu vijñāpyate vijñaptis tu tatkṣaṇikāpi bhavatīti (/) yady  
anubandhalakṣaṇāvijñaptiḥ anubandhaś ca pravāha iti pratjñaptisati(ṃ) prāpnoty  
avijñaptiḥ rūpalakṣaṇā satī pravāho na tu pravāhamāttarakam eva upalakṣaṇam  
etat tasyā ity asad etat\* (/) *śubhāśubhagrahanenāvyākṛtaś* cakṣurādipravāho  
viśeṣitaḥ

8 /// yathoktopalakṣaṇa(!) nanv asau(!) (/) *mahābhūtāny upādāyati* (vacanād  
prāptipravāho) viśesito bhavati (/) *tadanyacittasyāpīti* vijñapticittād  
anyacittasyāpīti ..... āvikṣi(ptya) cittakasyāpīti vijñāyata iti (/) *yo*  
*'yam apīśabdo 'smin śloke anenāvikṣiptacittakasyāpi jñāyate sacittakasyāpīti* (/)  
nanu cāvikṣipta-

9 cittakaḥ sacittakaṃ nātivarttate vijñapticitto 'tra sacittako 'bhipretaḥ  
tadanyacittakaḥ sacittako.. sa ..ḥ sacittaka iti sacittācittakasyāpi (/) *yo 'niban-*  
*dha* iti kin cokaṃ na kiṃcid evaṃ lāghavaṃ bhavati (/) idaṃ cāpi na jñāyeta

#### 4 今後の課題

この断簡が伝える注釈は、梵文とチベット語訳で残るヤショームトラの注釈とは全  
く異なるが<sup>15)</sup>、チベット語訳（一部は漢訳<sup>16)</sup>とウイグル語重訳<sup>17)</sup>）に伝えられるス  
ティラマティ (Sthiramati) の注釈<sup>18)</sup>、チベット語訳のみに残る満増 (\*Pūrṇavar-

dhana) の注釈<sup>19)</sup>とは多くの共通点が見られる。しかしこれがその両者のいずれかであるというわけではない。異なる注釈書である。ヤショーミトラの注釈書冒頭の帰敬偈によると、グナマティ (Guṇamati, 徳慧) とヴァスミトラ (Vasumitra, 世友) の2人が俱舎論注釈書を書いたというのが現存しない<sup>20)</sup>。もしかして、この断簡1葉がいずれかの注釈書の断簡である可能性はあろうが、現時点ではそれをはっきりさせる証拠は見いだされていない。失われたグナマティ疏とヴァスミトラ疏の断片をヤショーミトラ疏から抽出して考察した青原令知氏の研究が注目されるが、残念ながらこの断簡と関連する箇所は含まれていない<sup>21)</sup>。対応資料のない断簡から回収される文章を校訂テキストにまとめるのは現状では困難である。本稿で提示したのは断簡の単純なローマ字転写にすぎないが、これをこの断簡に対する今後の研究のための備忘としておくことにしたい。

本稿は平成11年度文部省科学研究費補助金「基盤研究(C)(2)」による研究成果の一部である。

15) Wogihara ed., part 1, p. 27, l. 18 ff.

16) 大正1561の他、最近になって蘇軍氏によってまとめた分量の敦煌写本断簡(第1章の注釈断簡)が出版された。「阿毘達磨俱舎論実義疏」『藏外仏教文献』第1号(北京, 1995) pp. 169-250.

17) 庄垣内正弘『古代ウイグル文阿毘達磨俱舎論実義疏の研究』I-III (1991-1993).

18) P. ed., To 57a2 ff. なお前半の「11種の接触」に対するスティラマティ疏の和訳は、松濤泰雄「tattvārthā (VI) 五境について」『佛教文化研究』第39号(1994) 9頁以下に含まれている。

19) P. ed., Ju 34b3 ff.

20) *op. cit.*, p. 1, l. 11.

21) 青原令知「俱舎論注釈家 Guṇamati とその弟子 Vasumitra」『仏教史学研究』第32巻1号(1989) pp. 50-80.